「ふたば園」の閉園に際して

宮　島　昭　六

昭和三十一年三月、待望の実習保育施設「ふたば園」の落成。校長先生はじめ関係者の喜びは大変なものでした。保育科の生徒たちと肩をたたき握手し喜び合った四十数年の昔が、つい昨日のように思い出されます。

四十八年も前になるでしょうか。昭和三十年の新年を迎えて間もない日、亀山高校の福岡校長先生から電話を頂きました。

「長野へは何時でも帰れるから、暫く亀山に途中下車してみないかね。誕生したばかりの保育科で勉強し苦労してみるのも、きっと君の将来に役立つと思うよ…。」

お言葉に甘えて五年間、亀山高校で勉強することになりました。

当時、保育科が設けられて一年、生徒は一年生と二年生、私には兎にも角にも教師になって初めての出合いであり、生徒たちが何とまぶしく初々しかったことか…、今でも忘れません。不安と喜び一杯の出発でした。

専用の器楽練習室はなく、講堂の隣りに仮の練習室が急造されたのは昭和三十二年であったと思います。

ましてや附属保育実習室などなく、生徒たちは亀山市や生徒出身地の保育園で実習をお世話になっていました。保育科に無くてはならない実習施設の設置は急務中の急務であり、学校当局はもちろん亀山市はじめ各方面の方々のご尽力は大変なものでした。

水色の上着に白いエプロン、そして紺の帽子が、水遊びに砂遊びに滑り台に、喜々として身体一杯に跳ね飛び回る純な園児たちの姿は、今も強く思い出されます。

私は授業の合間、よく「ふたば園」にお邪魔しました。保育室と保育室の間に設けられた観察室から園児の動きを観察しレポートするのが仕事でした。

また、今でも忘れることのできない強烈な思い出の一つに保護者懇談会の折などでの保護者への話があります。独身であり、すべてが経験の乏しい私が、小生意気に「保育」について話をするなど保護者はどのように受け取って下さったのか、今でも考えると冷や汗が流れます。しかし保母さんや園関係者、保護者の皆さんは寛大で心大きく温かく受け止めて下さり、恵まれた仕合わせに、感謝の念で一杯でした。

そのような思い出の尽きない「ふたば園」が閉じられる。

この気持ちをどう表現したらよろしいのか…、唯々感慨無量、万感胸に迫るものがあります。

沢山の素晴らしい思い出を与えてくれた「ふたば園」、保育指導者としての人格を育んでくれた保育実習の場「ふたば園」、そして心身ともに健やかな創造性豊かな子供を育ててき

た「ふたば園」の、ひたすら歩まれた四十七年に、心から大きな拍手をおくります。

本当にご苦労さまでした。有りがとうございました。

「ふたば園」の存在は、たとえ閉じようと永遠に消え去ることはありません。

「ふたば園」に心から感謝をささげ閉園へのことばといたします。

保育科の思い出

中　内　正　秋

保育科が設立されてから随分経ちましたので私も当時の事はすっかり忘れてしまいましたが、改めて回顧して見る事にしました。もし誤りがあればお許し下さい。

第一回保育科設立案は確か福岡法重校長先生の時代のような感じがします。第一回生の保育科担任を受け持ち３ケ年皆々様に助けられて過して参りました最初は保育の内容又指導法等中々不明の点が多く随分困りました。全く手探りの有様であります。生徒の通学範囲も広く又県外からの生徒もおりました。私は幸い明野の担任とは大学が同じであり懇意にしておりました関係上常に連絡を取りあって県の方へも出かけたものでした。気になるのは国家試験への対策であります又保育園建設に関しては土地の提供、又家屋の移転等多くのご家庭にご迷惑を御かけ致しました。

「心のふるさと・ふたば園」

堀　出　洋　子

私とふたば園の出会いは、昭和48年４月。家庭科の教師として、亀山高校に着任した時です。保育科主任の伊藤いへ子先生に案内していただきました。高等学校に実習施設があることを知り、驚くと同時に保育科の生徒は、幸せだなあと思いました。自らの学校の内で、実際に園児と触れ合い実習ができるという恵まれた環境、さらに、日々園児を保育されている先生方から学習指導が受けられることは素晴らしいことだからです。

そんな感激の出会いから、はや30年がたちました。その間、26年間の長きにわたり勤務させていただき、ふたば園を通してたくさんの方々（園児・保護者・生徒・先生・職員）と巡り会い、多くのことを学ばせていただきました。

初年度の遠足で尾高高原のキンダーハイムに行った記憶があるのですが、その時の園児が、高校生として入学し私が担任になりました。「これ先生？」と遠足の写真を見せられびっ

くり。そして、今度はその生徒が保護者になってふたば園で再会することになりました。このような出会いは一つや二つではなく、本当に時の流れを感じています。

古い園舎の運動場での運動会。保護者の方々の力みなぎる競争にけが人続出で競技内容を検討した時期から、体育館での運動会へ。夏の夕べを楽しむ会、クリスマスお楽しみ会お餅つき、など数え始めたらもうきりがありません。いろいろな場面で、ふたば園の先生方が、園児一人ひとりの力を引き出し、自立する力や創造する力などを身に付けさせるべく指導されているお姿は印象深く残っています。保育科・幼児教育コースに学んだ生徒にとってもそれは私同様に生きた学習であったと思います。

亀山市の地域の方々と連携して、毎年実施されていた子どもの日の行事やエコーでの発表会、平成4年から始めた亀山市の文化会館でのチャイルドフェスティバルに関しても、ふたば園の先生方のご指導によるものは大きく、園児や保護者の皆様にも支えていただき成功できたと思っています。亀高名物のアンパンマンが誕生したのは昭和63年であったと思います。頭部の張りぼてのもとを何にするか試行錯誤し、ついにこれだと決めたのはふたば園のリズム室にあったジャンピングボールでした。アンパンマンがバイキンマンを懲らしめる勧善懲悪の単純明快なお話ですが、毎回趣向を凝らしその年その年の生徒達が独自に振り付けをしてきました。保育科の全国大会や国民文化祭でも演じたものです。

保母試験の制度の改革が行われ、高卒段階で資格取得ができなくなったことや学校の特色化活性化という変革の時代の中で、平成6年から保育科と家政科を統合改編し、総合生活科を創りました。その中に幼児教育コースを設定し、保育科で行われていた教育の良き点を継承できるようにしました。

戦後、子どもの教育が今後の日本のために大切と保母養成が叫ばれ早々と亀山に保育科が創られ、養成のためには実習施設が必要と創られたふたば園。そして、たくさんの生徒や園児が育ち巣立ったふたば園が、幕を降ろそうとしている今、淋しく残念ではありますが、きっといつまでもいつまでも一人ひとりの心の中に「ふたば」は故郷として存在し、何かの時はふとそこに戻れるのではないかと思っています。

私自身にとっても、亀山高校そしてふたば園は教師生活の原点です。そこに戻る時、必ず初心に戻るとともに新たなパワーを得ています。

ありがとうふたば園、ふたば園よ永遠に・・・。

心のふれあい「ふたば園」

瀬　古　佐和子

4棟1階の最も東側にある大きな部屋。現在は多目的に使われている教室ですが以前は3年生保育科のホームルームでした。私は家庭科の教員として平成6年から勤務していますが、この教室は当初、見るもの全てが新鮮だった私にとって驚きの1つでした。

時間割には「実習」という文字が並び、教室の北側には数台のアップライトピアノがありました。「保育」を専門的に学ぶという雰囲気すら感じた事がなかった私にとっては未知の世界でした。

保育科から総合生活科の幼児教育コースへ引き継がれ、保育の専門教育の大切さやふたば園の存在意義など解りかけた2年前から学科の主任としてふたば園の先生方と触れる機会があり、その大切さをさらに強く感じている現在です。私事ですが、5歳と7歳の子どもがおり、ふたば園の園児を見るたびに自分の子どもと重なり、ふたば園での生活に規律があり、とても家庭的な温かい園だと母親の目として感じています。

さて異年代の人と関わる事の少ない高校生にとって、園児とのふれあいは貴重な体験です。実習を通して園児とふれあった事、園児と接する現場の先生である牛尾先生や澤先生に巡り会えた事は高校生が「保育士」という夢を確かなものとして捉えていたはずです。また高校では総合生活科となり、それまでとスタイルを変化させなくてはならない事もありましたが、堀出先生、川合先生そして現在は高橋先生、百々先生がご努力された事は言うまでもありません。

3年生になり「ふたば園の実習が楽しみ」という生徒の生の声。放課後、園庭でボール遊びをする生徒達。高校生にとっても「安らぎの場」だったようです。ふたば園の先生方、そして父母の皆さん、かわいい園児達、たくさん有り難うございました。

ふたば園の思い出

下　　宰　江

「創立以来二十五年を経た、亀山高校保育実習施設ふたば園の園舎が古くなり、この度新しい園舎が完成することになりました。思い出多いふたば園に、久しぶりに皆で集まり楽しいひとときを過しましょう。」のお誘いを頂いたのは、春まだ浅い一月の終り。

三重県に始めて出来る高等学校の保育実習施設ということで、昭和三十一年四月、保育短大の恩師から急なお話で、私が行く事になり、トンネルを幾つも抜けて、山裾に添った

川の流れを車窓から見ながら、希望と不安の入り交じった気持ちで赴任した。はじめて見た園舎は保育室が二つだけ。とりあえず机、椅子をはじめ子供達の使うものすべてを、設計から品選び、配置まで一つ一つ皆で相談しながら決めていった。そのうち亀高うで公募の結果、園名も“ふたば園”に決まった。保育内容は、池田先生、岡田先生と相談して、幼稚園、保育園の良いところを取り入れ、ふたば園独特の方針でいく事にした。五月になっていよいよ保育が始まったが、トイレと給食室はまだなく、雨の日も風の日も子供達を本校まで連れて行き、給食も本校で作って、ふたば園まで運んだ。その後トイレ、給食室が増築されたが、その時の嬉しさは今でも忘れられない。春秋の遠足、夏のキャンプ、七夕まつり、いも掘り、運動会、七五三のお宮詣り、クリスマス、お誕生会、豆まき等々自然に恵まれた環境での保育は、子供達にとっても、保育者にとっても本当に幸せな毎日だった。ガラス窓に、のびのびと描いた絵、「白い色がハッキリ見えるよ。」と大喜びの子供達。空き箱で作った大きな家や動物。材木をゴシゴシ、板をトントン、ふたば園に一日中のこぎりや、金鎚の音が響く日もあった。子供達の生き生きした姿が今も脳裏に焼きついている。

ふたば園だけでなく、本校の先生方、実習生の人達との交流も、子供達の成長の上にプラスの面が多かったと思う。本校の先生方や皆様が、私たちを暖かく見守り接して下さって、本当に有り難かった。お世話になった小亀先生や中西先生は既に亡く、お会いすることも出来ず淋しい限り。

二十一年ぶりにふたば園を訪ね、なつかしい方々にお会いした。今でも、ふたば園創立時の精神が代々受けつがれてきているのを感じて、本当に嬉しかった。皆さん、お互いに少々年はとったが、十数年の空白は全く感じられず、時のたつのも忘れて話がはずんだ。皆さんが、それぞれの場でご活躍のことを知り、さすが…と嬉しかった。

亀山駅の駅前は賑やかになったが、まだまだ街の様子も昔の面影を残しているし、亀山弁も懐かしく、心地よく耳に響きしばらく聞きほれた。

十年ひと昔というが、ふたば園創立以来、二十五年も経たとはとても思えずあの頃ふたば園で一緒に過した子供達は、今はもう三十代。結婚して立派な社会人や、お母さんになっているのだろうが、私の頭の中には、まだ四才～五才の頃の子供達の、一人一人のかわいい声、顔、しぐさしか浮かんで来ない。（以下略）

……は、亀山高等学校六十年史（昭和57年11月12日刊）に寄稿した私の文です。

あれから二十一年の歳月を経て、亀山も広い道路が通り、あちこちにマンションが建っ

て、すっかりさま変り。あの頃の子供達も、もう四十代の働き盛り。今のきびしい世の中で、苦労しながらがんばっているのでは…と思いを馳せています。

昭和三十五年の春休み、生後四ヶ月の長男が、私からしかオッパイを飲まなくなってしまった。それまで子供の事と留守をお願いしていたおばさんからは全然飲まないので、いろいろ努力してみたが駄目。子供の生命にかかわることだからと医師からも言われ、とうとうふたば園を退職する決心をした。思いがけない事情で仕事半ばで退職する事になり、子供達にも、関係の皆様にもご迷惑をおかけすることになり、今でも申し訳ない気持ちでいっぱいです。

ふたば園時代、子供達に、楽しい思い出をいっぱいつくって上げたいと思い、いろいろの経験を一緒にしました。私にとっても、本当に大切な貴重な年月でした。

ふたば園によせて

宮　本　志津香

大学で幼児教育に出会い、「幼児教育こそ自分の進む道」ときめた私に、ふたば園という場が与えられました。何もかも新しく、何もかも初めてで、夢が一杯、意欲も一杯でした。しかし、現実の私は、幼児を前にしてどのように言葉をかけ、どのように指導すればよいのか、生活習慣の身に付けさせ方さえわからない、その上、自分自身の生活（掃除、洗濯、食事の支度など）すらできない有り様でした。一緒に赴任してこられた下先生（当時横山先生）が、やさしく、ご経験が豊富で、保育方法はもちろん、一緒の下宿生活の中で、私生活のすべてもご指導いただきました。

下先生は、私のような未熟者の発想や希望をすべて受け入れて、それを生かすようにしてくださったので、私は、思う存分ふたば園を楽しむことができました。私のような新参者の考えや行動を許していただいたことは、下先生の大きなお人柄のお陰だと感謝しておりますし、そして、それがその後のふたば園の教育方針や運営方法の伝統に生きていってるのではないかと思います。

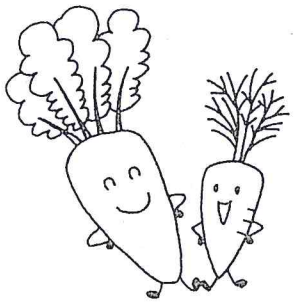
高校生の授業は、自分がついこの間まで受けてきたものを、生徒達に再現するようなもので、楽しくやり甲斐がありました。どちらかというと、保育よりも授業の方に自信があったかなと思っています。高校生との触れ合いが今の短大の勧めに生きているように思い、これまた、亀山とのご縁に感謝です。

わずか１年足らずしかいなかった亀山、そしてふたば園ですが、社会へのスタートの場でしたので、強烈な思い出となって心の底にあります。多くの方との触れ合い、初めて受け持ったかわいい子供たち、どれも忘れることができません。ふたば園がなくなるのは淋

しくて辛いですが、形としてはなくなっても、私の幼児教育の原点としてのふたば園は、永久に私の胸の中で生き続けることでしょう。

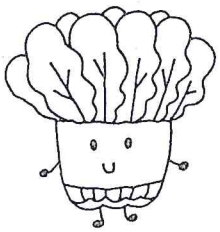
ふたば園開園当時の思い出

藤　田　佳　子



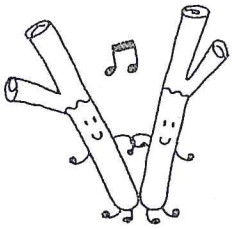
昭和30年の末頃だったと思いますが、母校亀高から保育園を開園するので給食の仕事をしてみませんかとお話があり、31年の春、ふたば園の開園と同時にお世話になる事になりました。

当時、食物科を出たばかりで、学生の頃病院や保健所に実習に行った事はありましたが園児の給食を作る経験はなく不安を持ち乍らの出発でした。御一緒だった下先生は経験もおありで保育園の給食について色々と教わり乍ら高校の家庭科の実習室の一部を借りて全く手さぐりの状態で給食作りを始めました。



最初は私一人で給食の全部をしていまして、二年目頃からだったと思いますが高士さんに手伝っていただく事になり大変助かりました。雨の降る日は傘をさしながら出来た給食を園まで運んだ事でした。

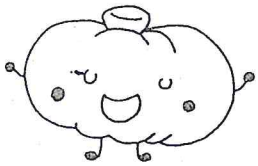
当時を思い出しますと、衛生面では私なりに大変気を使っておりましたが、冷蔵庫もなく、食器を消毒する設備もなく、現在の衛生観念から到底考えられない事でした。



園児達は、作った給食を皆残さず食べてくれまして私にとっては嬉しい事でした。

その頃人気のあったのはカレーだった様に思います。

園では、色々な行事があり私も参加させていただいておりました。中でも夏休みに行われるふたば園でのキャンプは、園児達も親と離れて始めての外泊の子も多かったと思いますが皆楽しい夜を無事に過ごしました。また、名古屋の東山動物園への遠足も思い出の一つです。



私は現在郷里を離れて住んでおりまして、亀山を訪れる機会もなく、この度四十数年ぶりに、ふたば園を訪れる機会をいただき懐かしさで一杯でした。思い出多いふたば園が閉鎖される事を聞きこれも時代の流れでしょうか、本当に淋しい思いがいたします。